

## 2024年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
人間健康学部 人間健康学科	助教	松田凌
最終学歴	学位	専門分野
中京大学大学院心理学研究科博士後期課程	博士 (心理学)	臨床心理学

### I 教育活動

#### ○理念・目標・方針・計画（方法）

##### 【理念】

他者の幸せを願い、自己の幸せをかなえる人材の育成

##### 【目標】

社会問題の一つであるメンタルヘルスに係る諸問題の予防・解決に取り組める「真に信頼して事を任せうる人格」を有する人材を育成する。

##### 【方針】

心理学分野の多彩な知見を提供し、自律的に問題意識をもち考える機会を提供することで、社会や日常生活で起こり得る困難へ対処する力を身につけることをサポートする。

##### 【計画（方法）】

心理学分野の様々な授業を通して、メンタルヘルスに係る問題へ積極的に関心を向け、その解決を担えるよう人材の育成を行う。具体的には、講義を通じた正しい知識の提供と、実践を見据えた演習時間を両立させることで、知識・スキルともに身につけ社会に役立つ人材を輩出する。また学外実習を通じて、心理支援職の実践について体験的に学んでもらうことで、専門職として活躍できる人材を育成する。

#### ○担当科目（前期・後期）

##### （前期）

専門演習Ⅰ，専門演習Ⅲ，総合演習Ⅰ，教育相談（中・高），心理実習

##### （後期）

専門演習Ⅱ，専門演習Ⅳ，総合演習Ⅱ，感情・人格心理学，心理的アセスメント，産業・組織心理学，健康・医療心理学

#### ○教育方法の実践

講義系の授業では、毎回の小テストを課す、穴抜き資料を配布するなど、受講生が主体的に講義へ参加するような仕組みを取り入れた。また授業資料（PDF）を配布することで、講義内容の復習を容易にし、加えてレポート課題を課すことで欠席学生の平常点への配慮を努めた。

#### ○作成した教科書・教材

特になし。

#### ○自己評価

概ね計画通りに教育を提供することができた。また心理系大学院への進学を希望する学生の受験勉強、研究計画にアドバイスをするなど、担当授業以外での教育活動にも勤しんだ。一方で、前年度までの同一科目と比較して、単位取得に至らなかった受講生の割合が増加したことから、受講生

の理解やモチベーションに合わせた講義を提供できていなかった可能性がある。この点は次年度以降の課題としたい。

## II 研究活動

### ○研究課題

ロールシャッハ法及び描画法といった、心理臨床の実践で使用されているアセスメントツールの信頼性・妥当性を検証する。また各ツールの効果的なフィードバックの方法について検討する。

### ○目標・計画

#### 【目標】

上記の課題を目的とした研究報告を行う。大学生を対象とした基礎研究や、臨床現場で得たデータを用いた応用研究など、使用可能な環境は最大限活用しつつ、広範なアプローチから検討、報告を行えるよう尽力する。

#### 【計画】

ロールシャッハ法については、反応産出過程の認知心理学的理解を目指した研究を計画しており、研究資金が獲得できれば実施する。また医療機関と連携し、精神疾患を抱える方のロールシャッハ法、描画法のデータを共有してもらっているため、研究としてまとめ学会及び論文にて報告する予定である。

### ○2017年4月から2025年3月の研究業績（特許等を含む）

#### （著書）

- ・ 松田凌 (2023) 「人さまざま」な私たちが抱える心理的課題とその支援 人間健康学 第 17 章 (p189-199)

#### （学術論文）

- ・ Matsuda, R., Suzuki, C., Takamura, K., & Hatano, Y. (in press) Exploring Cognitive Processing and Neural Correlates in Rorschach Responses: A Reanalysis of Two Experimental Studies., *Rorschachiana*
- ・ 明翫光宜・伊藤大幸・白石雅一・望月直人・小倉正義・高田晃治・松田凌・鈴木康之・鈴木勝昭・高柳伸哉・村山恭朗・山根康宏・水間宗幸・水口勲・中島卓裕・浜田恵・中島俊思・野沢朋美・曾我部哲也・辻井正次 (2024) 救護施設入所者の心理学的・精神医学的特徴の実態調査 臨床精神医学 53(8), 1031-1042
- ・ 松田凌・北村隼大・津端亮介 (2024) もの忘れ外来受診者の認知的・心理的機能と介護負担 認知神経科学
- ・ 明翫光宜・高柳伸哉・鈴木勝昭・鈴木康之・伊藤大幸・村山恭朗・山根康宏・小倉正義・水間宗幸・白石雅一・望月直人・水口勲・中島卓裕・浜田恵・中島俊思・野沢朋美・高田晃治・松田凌・曾我部哲也・辻井正次 (2023) 無料低額宿泊所入所者の心理学的・精神医学的特徴の実態調査 臨床精神医学 52(10), 1235-1245
- ・ 松田凌・安野奏 (2023) 衛生マスクと髭が顔の魅力に与える影響 東邦学誌 52(1), 9-17
- ・ 馬場史津・松田凌 (2022) 描画テストの解釈過程—解釈の基礎と所見— 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 21(1), 37-43
- ・ 松田凌 (2021) ロールシャッハ法に現れる注意制御の困難さ——不快刺激へ注意が向きやすい 1 事例からの検討—— 中京大学臨床心理相談室紀要 21, 15-27
- ・ 松田凌 (2021) 高 ASD 傾向者のロールシャッハ反応——視覚的注意の機能に着目して—— 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 20(1), 43-54

- ・ Matsuda, R. (2019) Multiple emotion regulation in Rorschach color responses: A study using IAT and self-report., *Rorschachiana* 40(2), 112-130
- ・ 松田凌 (2018) ロールシャッハ・テストの色彩反応と情動刺激によるストループ干渉の関連 *ロールシャッハ法研究* 22, 42-53
- ・ 松田凌 (2018) 無気力を訴える高校生との面接過程に関する考察——心理検査の活用には焦点を当てて—— *中京大学臨床心理相談室紀要* 18, 1-8
- ・ 松田凌・馬場史津 (2017) ロールシャッハ反応産出過程における認知的制御の役割——情動ストループ課題を用いた検討—— *中京大学心理学研究科・心理学部紀要* 17(1), 53-61

(学会発表)

- ・ Matsuda, R. & Suzuki, C. (2024) Understanding Rorschach Responses through Facial Expression Tasks. *The XXIV Congress of the International Society of the Rorschach and Projective Methods.*
- ・ 松田凌・北村隼大 (2024) 統合失調症患者に認められる WAIS-IV の特徴 第 29 回認知神経科学会学術集会
- ・ 松田凌 (2023) 未来は“若手”の手の中？ 若手シンポジウム「投映法研究の予想図——これからの 100 年に向けた若手研究者の声——」日本ロールシャッハ学会第 27 回大会
- ・ 松田凌 (2023) 高 ASD 傾向者のロールシャッハ反応——片口法と R-PAS の比較から—— 日本ロールシャッハ学会第 27 回大会
- ・ 松田凌・馬場史津 (2022) 描き慣れた「木」に現れるもの、表れないもの——「本当の自分」を知りたい教師の事例から—— 日本描画テスト・描画療法学会 第 31 回大会
- ・ Matsuda, R. (2021) The effect of negative attentional bias on the Rorschach response process. *2021 Virtual SPA Convention, Poster, Pre-recorded sessions,*
- ・ 松田凌 (2020) 再評価と抑制が反応産出に与える影響——情緒的な反応内容に着目して—— 日本ロールシャッハ学会第 24 回大会
- ・ 松田凌 (2018) 損傷反応 (MOR) と情報処理バイアスとの関連 日本ロールシャッハ学会第 22 回大会
- ・ 松田凌 (2017) 色彩反応と感情制御の方略および潜在的選好との関連 日本ロールシャッハ学会第 21 回大会

(特許)

特にありません。

(その他)

特にありません。

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

特にありません。

○所属学会

日本心理臨床学会, 日本ロールシャッハ学会, 日本心理学会, **Society for Personality Assessment**, 日本描画テスト・描画療法学会, 認知神経科学会

○自己評価

他大学の共同研究者とともに、論文の投稿に漕ぎつけることができた。また国内外の大会で研究発表を行うことができたが、思うように研究活動を進めることができなかった。新規のデータを取得することが困難な状況であることから、臨床事例などを収集しつつ、まとめて発表できる機会を

伺っていきたい。

### Ⅲ 大学運営

#### ○目標・計画

##### 【目標】

「真に信頼して事を任せうる人格」となる可能性を秘めた人材をより多く入学させるため、入試委員会として広報や選抜の業務に注力する。また新たに立ち上がった IR 委員会の活動を通して、本学の発展に寄与することを目指す。

##### 【計画】

学習・通学意欲の低下といった、本学学生の中退に影響する要因を客観的に把握し、効果的な中退防止策を策定できるよう検討する。

#### ○学内委員等

入試委員会として、本学で実施される入試業務の運営や入試問題の作問、大学共通テストの試験監督などの業務に従事した。また IR 推進委員会では、卒業時アンケートをはじめとする調査項目の精査や学生への結果報告の方法の検討、他大学の IR 活動の要約・発表といった業務を全うした。学部内では中退防止 WG としての役割を担い、中退が懸念される学生に関する情報共有やサポートの依頼などを行った。

#### ○自己評価

入試委員会の業務は 2 年目となり、初年度の教員のサポートに回るなど、多少の余裕を持って活動に参加することができた。また新たに加わった IR 推進委員会では具体的な成果を残せなかったため、次年度以降は委員会に貢献できるよう努めたい。

### Ⅳ 社会貢献

#### ○目標・計画

##### 【目標】

精神疾患への罹患をはじめ、メンタルヘルスの問題を抱える方が生きやすい社会の実現を目指す。

##### 【計画】

臨床心理学的支援に関する研究を報告することで、心理支援職あるいはメンタルヘルスの問題を抱える方に役立つ知見を提供する。また心理支援職として医療機関に勤務することで、精神疾患を患う方の直接的な心理支援の役割を担う。

#### ○学会活動等

国際学会へ参加し、国内外の研究者とコミュニケーションをとることができた。将来的には共同研究を行い、成果を公表したい。また日本ロールシャッハ学会では「若手の会」の設立に携わり、オンライン上での研究者間の交流の促進や、研究論文や文献の輪読会の企画・運営をサポートするなど、コミュニティ全体での活動を盛り上げるため尽力した。

#### ○地域連携・社会貢献等

精神科クリニックで心理支援職として職務を全うし、メンタルヘルスの問題を抱える人へ支援を提供した。また高校生向けの出張授業や、専門学校で非常勤講師として授業を行う際に、心理支援職の業務を具体的に紹介することで、国民の健康を支える専門職への関心を高めるよう努めた。

#### ○自己評価

所属学会で大学院生を中心とする若手研究者の活動をサポートする、高校生・学部生に向け心理

専門職の魅力を発信するといった形で、臨床心理学という学問領域に寄与した。また医療現場に心理専門職の立場から携わることで、支援を要する人を援助し、加えてその経験を教育活動に活かすことができた。

#### V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自身の臨床技術を高めるため、そして修得した知識や技術を教育に還元するために、専門学会や研修会・研究会等へ積極的に参加する。また国際学会での発表を積極的に行なっていくため、英会話のトレーニングを継続する。精神科クリニックでの職務を通して、臨床データを収集しており、折を見て発表する。

#### VI 総括

新規担当科目の割り当てや、演習担当学生の臨床的サポートを要する機会があり、研究活動に注力できなかったことが悔やまれる。次年度も新規担当科目を割り当てられているため、上手く時間を捻出しつつ、必要な学生の支援・教育、自身の研究活動を進めていきたい。

以 上